

平沢官衙遺跡における市民参画型再整備デザイン検討ワークショップの実施

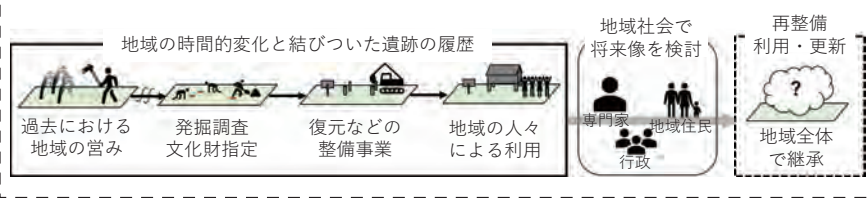
ー 地域社会の変化に順応できる遺跡整備のあり方を目指してー

協園 大史

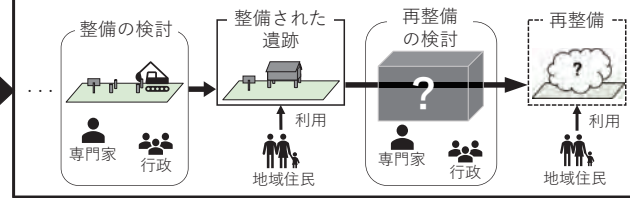
筑波大学大学院世界遺産学学位プログラム / s2030499@u.tsukuba.ac.jp

背景 | 史跡整備の過程における意思決定のブラックボックス化

理想：地域社会と持続的な関係を持つ遺跡



現状：専門家を中心とする遺跡の意思決定



目的 | 遺跡の再整備過程への地域住民の参画と地域社会における将来像の共有

平沢官衙遺跡（つくば市・国指定史跡）

- ・古代律令制下の常陸国筑波郡衙正倉院に比定
- ・昭和55（1980）年に国史跡に指定
- ・平成5・6（1993・1994）年に面的な確認調査、掘立柱建物群、礎石群等が発掘調査で確認
- ・調査成果から平成9年度（1997）復元整備工事開始
- ・平成15（2003）年「平沢官衙遺跡歴史ひろば」開園

開園時の柱位置表示

- ・Ⅱ期（8世紀前半）建物群：12棟
- Ⅲ期（8世紀後半）建物群：8棟
- 計20棟を表示
- ・直径35cmとしてタモ材を使用
- 高さはⅡ期：20cm、Ⅲ期：45cm

柱位置表示の現況

- ・整備から8年ほどでタモ材にひび
- ・平成23（2011）年までに全て腐朽
- ・遺失し、ボルト部分が露出
- ・ロープで囲み立ち入り禁止措置、竹材を被せて仮修復
- ・令和元（2019）年度に竹の交換

再整備予定の柱位置表示

- ・時期差による建物配列を明確にするため高さおよび色に差
- ・素材は木ではなく、耐久性のあるコンクリート製（ビシャン仕上）
- ・Ⅱ期：284本、Ⅲ期：148本を設置予定（外周柱含む）
- ・腰掛にも用いることができるように



- 検討課題
- ① 実際に設置した際の見え方
 - ② 整備後の活用方法
- 再整備イメージを地域社会で共有し、将来的な活用手法を検討する必要

平沢官衙遺跡における再整備デザイン検討ワークショップ「みんなで考えよう！平沢官衙遺跡の未来」

日時：2023年3月4日 | 場所：平沢官衙遺跡 | 参加者：25名（地域住民：13名、つくば市文化財課職員：3名、専門家：1名、学生：8名）

ワークショップの流れ

- ① 平沢官衙遺跡の概要および再整備に関する説明
- ② 柱位置表示実物大模型の作成
- ③ 遺跡内への設置と意見交換会
- ④ オリジナルデザインの柱模型の作成と設置



再整備デザインを可視化した状態での意見交換会



高さや色の違いが時期差を表現していることは、見学者に伝わりにくいのでは



腰掛として使うには数が多すぎるため、何に使うのか検討が必要



実際に並べることで、遺跡を作ったような感覚になり、愛着が湧いた



再整備後の様子がイメージしやすく、整備懇話会でも使用したい



将来的な活用手法の提案と検討

- ・参加者各自がオリジナルデザインの柱模型を作成し、遺跡内に設置
- ・参加者の自由な解釈を促進させつつ、柱位置表示の検討に関心を持ってもらう
- ・将来的な子ども向けワークショップメニューに



ワークショップの結果と今後の展望

- ◆現実の遺跡空間上に再整備デザインを可視化
⇒地域住民を含めたあらゆる人々による将来像の共有と議論が可能に
- ◆将来像を共創することで愛着の醸成につながる
⇒「自分ごと」として遺跡を捉える機会に

将来的な活用等の継続的な議論を喚起し、
遺跡や地域の将来的な変化に順応可能な整備へ

